

○普及に移す技術

〔タイトル〕 アカヒゲホソミドリカスミカメおよびトゲシラホシカメムシの両種に対する有効薬剤

〔要約〕 フェニルピラゾール系の新規殺虫剤キラップ粉剤 DL・粒剤は、残効性に優れ、アカヒゲホソミドリカスミカメおよびトゲシラホシカメムシの両種に対する防除効果が高い。

〔キーワード〕 アカヒゲホソミドリカスミカメ、トゲシラホシカメムシ、有効薬剤

〔担当場所・課〕 農業技術センター・農業試験場・病理昆虫課

〔連絡先〕 電話 076-429-5249、電子メール byoukonka@agri.pref.toyama.jp

〔背景・ねらい〕

斑点米は、米の品質低下要因の一つである。本県における斑点米の原因となるカメムシの優占種は、アカヒゲホソミドリカスミカメ（以下「アカヒゲ」）とトゲシラホシカメムシ（以下「トゲシラ」）である。アカヒゲに対してはネオニコチノイド系殺虫剤のスタークル剤およびダントツ剤、トゲシラに対しては有機リン系殺虫剤の防除効果が高いことが知られている。しかし、いずれの薬剤も片方の種に対してのみ優れた防除効果がある。そこで、新たに開発されたフェニルピラゾール系殺虫剤であるキラップ剤の両種に対する防除効果を明らかにする。

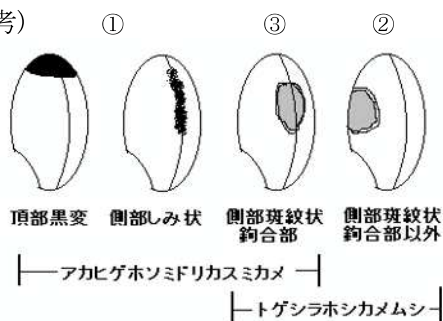
〔成果の内容・特徴〕

- 1 キラップ粉剤 DL のアカヒゲに対する防除効果は、スタークル粉剤 DL と同等に高い（図 1）。また、キラップ粉剤 DL のトゲシラに対する防除効果は、スタークル粉剤 DL やダントツ H 粉剤 DL よりも優り、有機リン系殺虫剤エルサン 3 粉剤 DL と同等に高い（図 1、図 2）。
- 2 キラップ粒剤のアカヒゲに対する防除効果は、スタークル粒剤と同等に高い。また、キラップ粒剤のトゲシラに対する防除効果は、スタークル粒剤よりも優る。さらに、キラップ粒剤は出穂前 12 日の施用でも防除効果が高い。（以上、図 3）
- 3 キラップ粉剤 DL・粒剤は、他剤に比較してトゲシラに対する殺虫効果が持続し、残効性に優れる（表 1）。

〔成果の活用面・留意点〕

- 1 斑点米カメムシ類に対する防除対策として、アカヒゲとトゲシラの両種が発生する地域・水田での本剤の使用が有効である。
- 2 キラップ粉剤 DL はカメムシ類の他にウンカ類に対して農薬登録があるが、ツマグロヨコバイに対して農薬登録がない。
- 3 キラップ粒剤は農薬登録申請中である。

（参考）



- ① 頂部黒変・側部しみ状：アカヒゲの加害
- ② 側部斑紋状（鉤合部以外）：トゲシラの加害
- ③ 側部斑紋状（鉤合部）：いずれかの種による加害

[具体的データ]

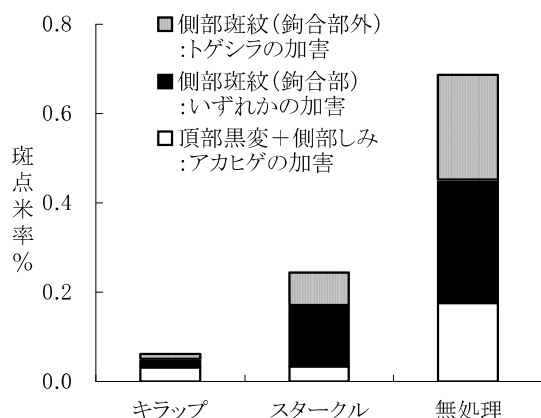


図1 斑点米カメムシ類に対する粉剤の防除効果 (2006 年)

- ・品種: てんたかく (出穂期 7/26)
- ・出穂後 5 日に薬剤散布。

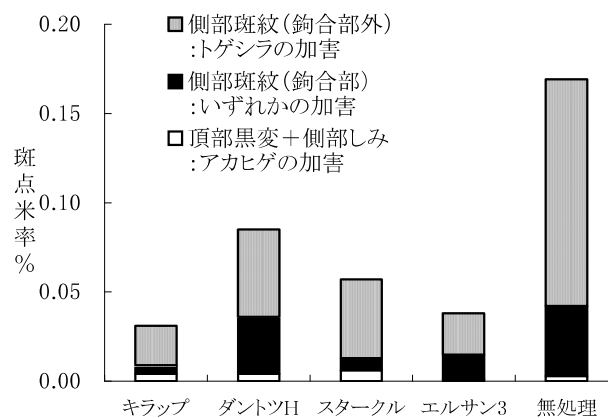


図2 斑点米カメムシ類に対する粉剤の防除効果 (2005 年、トゲシラ放飼試験)

- ・品種: てんたかく (出穂期 7/26)
- ・出穂後 14 日に雌雄各 10 頭を放飼し、その直後に薬剤散布。

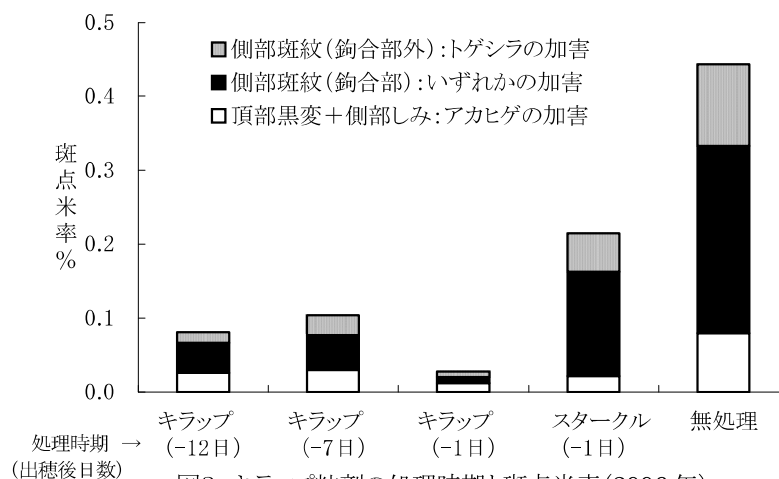


図3 キラップ粒剤の処理時期と斑点米率(2006 年)

- ・品種: てんたかく (出穂期 7/26)

表1 各薬剤の残効性(2005 年・2006 年、ポット・放飼試験)

	供試薬剤	薬剤処理後の放飼時期別 トゲシラ死虫率(%)		
		直後放飼	2-3日後放飼	7日後放飼
粉剤	キラップDL	100	83.3	58.3
	ダントツHDL	58.3	16.7	0
	エルサン3DL	75.0	8.3	0
	無処理	0	8.3	0
粒剤	キラップ	—	100	100
	スタークル	—	91.7	33.3
	無処理	—	4.2	0

- ・粉剤: 出穂後8日に薬剤4kg/10a 処理し、処理直後、3日後および7日後にトゲシラ成虫2頭/ポットを放飼。放飼後5日に死虫数を調査。1/5,000a ワグネルポットを各処理6ポット供試。(2005 年)
- ・粒剤: 出穂後3日に薬剤3kg/10a 処理し、処理2日後、7日後にトゲシラ雌雄各4頭/ポットを放飼。放飼後2日に死虫数を調査。1/5,000a ワグネルポットを各処理3ポット供試。(2006 年)

[その他]

研究課題名: 主要病害虫の薬剤防除法 4) 斑点米カメムシ類に対する有効薬剤

予算区分: 県単

研究期間: 2006 年度 (2005~2006 年度)

研究担当者: 吉島利則、村岡裕一 (砺波農普指セ)、菅野亘、青木由美、中川俊昭

発表論文等: なし